









花鳥図六曲屏風半双

蘇鉄図六曲屏風半双

(金沢市内某寺蔵)

原 田 太 一

私は最初この一双の屏風を見た時、加賀藩前田家にゆかりのあるものでないかと考えた。加賀藩には加賀狩野と称する即誉一派のものがあり即誉種信の如きは他の狩野諸家に比べて決して劣るものではなく非凡の名手であったのである。でこの屏風も所蔵される所が市内の寺院であり、前田家あたりの拝領品でないかと思ったのであるが、その画風が狩野派でも古法である点、又入手の経路などを聞く中に未詳な点或いは数代以前に関西方面からとの云伝えを聞くに及んで、加賀の狩野との関係は考えない方が適當だと思ふに至ったのである。然らばこの一双の一見全く相反した感情を持つかに見える二つの屏風の制作年代はというに、私は左程の隔りを感じないのであって、むしろ同時代と云い切つてよいと思ふ。その理由は、背景の金箔の色及び大きさが全く同種のものである点、又蘇鉄の根元の笹の筆法と梅の図の屏風の岩による根笹の相似とを見ればよくこれを証するに足る。共に十分に桃山期の余韻を伝えた徳川初期のものと思ふと推察される。

松梅之図屏風は、一見平凡な図柄ではあるが、松の小枝の筆法の伸び伸びした筆使いや、白梅の活達な筆法、梅による雉子の平安な風情など巧まざる布置の妙を示している。特に背景の金箔の雲形は、全画面を二分して、そのなだらかな線によって個々のものをまとめ乍ら画面に落付きと静けさを与えている。我世の春を楽しんでいるかに見える雌雄の雉子の格恰、又それを囲んで伸びる梅の若枝、静かに淀む水、側々と暖かい春の兆しを感じずるではないか。

蘇鉄の図屏風は、当時としてはまことに変わった材料を扱ったものだと思う。思うに作者は狩野の技法を持って新しい試みをして見たかたに違いない。谷川の早瀬に望むに円い小高い緑青の丘を以てし、これに金の柴垣を配して色の変化を求めたものであろう。溪流のふちの岩には紅葉した木の葉が描かれている所から見るとこの図は秋の風情を写したものであろう。こう考えてくると、前図と一双にして春秋屏風と同一の作者になるものでないかと一応疑つて見たのであるが、どうしてもその画面から受ける感じの相違、又岩の皴法などの一は

伸び伸びとやわらかなのに比し一は生硬である点、根笹の筆法は同一でも受ける感じの硬軟の差違から違った作者のものを季節から一双にしたものと思われる。蘇鉄や柴垣、丘などの技法が写実から出て様式化された新しい試みであるのに反し、溪流や岩、岩に生えた草木などが従来の狩野の筆法で無雑作に描かれているのを見ると、いささか遺憾である。或いは画面の変化を求めての作者の意図であったかもしれないが、何処か意、到らぬ感じがする、がこれとて佳品であること論を俟たない。共に市内に現存する優作の一つであるので、ここに紹介する次第である。